第83回

日中経済交流研究会新聞

2019年 訪中団レポート

「日本人の中国観はもはや時代錯誤。縮まり 広がる 中国との差！」

(2019年10月20日～24日)

今年の訪中団は、総勢27名。中国の首都北京と天津を訪問しました。七つの企業と一つの学校を見学、そして１回の講演を拝聴しました。今回は、環境・半導体・自動車・食品・印刷・物流・そして教育と、非常に内容の濃い訪問となり、それぞれに驚きと深い学びがありました。すべてを記事にすることは難しいのですが、その一部をご紹介したいと思います。詳細を聞きたい方は、ぜひ12月9日の訪中報告例会へお越しください。

北京大野木環境コンサルティング有限公司

同社は、中国国内において環境に関するコンサルティングを行う企業です。年々厳しくなる環境規制についての講演を伺いました。環境規制は新たなチャイナリスクであり、また存続に関わる重要な課題です。なぜ政府は環境規制を看板政策に掲げるのか?それは、人民に環境改善とその実感（環境における幸福感）を提供することにより党の支持を獲得することが最も大きな目的だということです。環境対策は、「経済発展の尻ぬぐい」ではなく、意思決定の最初に取り組む課題として挙げることで、先進国に一歩でも近づこうとしているのではないでしょうか。

北京盛通印刷股份（印刷会社）

本や雑誌の印刷製本を行う同社は、「みどり印刷」（みどりとは環境に良いという意味）の表彰を受けており、環境に配慮していると認められた会社です。ここでもまた「環境問題は、毎年基準が厳しくなりプレッシャーがかかってきている」と語っていました。

「企業としての社会責任を持ち、国のため、国民のため、環境問題に取り組んでいく」と語っておられたのが印象に残りました。

北京屹唐半导体科技（半導体）

この企業は、半導体の製造装置を製造販売しています。「基礎となる技術はまだまだ日本が優位ではあるが、今後10年間は基礎を作るため、緻密に成長していきたい」と語っていました。また彼らは「日本はまだまだ保守的で、そんな姿勢が機会損失を生んでいるのではないか。日系企業にとって、中国での市場開拓は必須であり、それは日本の中小企業にとっても同じこと。日本の技術を中国と一緒に生かしてワールドワイドに展開すべき」と考えているということが伝わってきました。そして「アメリカに負けるわけにはいかない。そのためにも、日本企業と組むことで一つの武器としたい」と我々に熱く語ってくれました。

天津

天津では、中国へ早くから進出し、メイドイン中国の日本酒を製造販売する中谷酒造さんと、中国国内において電子部品の輸送･保管などのサービスを行う（株）アルプス物流。そして、35年前は塩田であったという天津経済技術開発区（TEDA）を訪れました。TEDAは、海外からの企業は約5000社が進出しており、そのうち日系は440社。医療、石油化学、自動車などが進出し、活気ある街づくりの様子を見学しました。

拍手が鳴りやまなかったガイドさんの言葉

5日間訪中団に同行し、さまざまな面でお世話になった彼女（通訳）は我々に次のような言葉を送ってくれました。「両国の間には、暗い過去も有ったけれど、今後はお互いを認め合い互いに発展していきたい。中国は、目先の利益（物欲等）を追うことばかりに終始していて、物心両面での幸せを得るまでにはいたっていないと思います。中国はまだまだ日本には学ぶべきところがあります。私は、お互いの良いところを伝え、中日の橋渡しをすることができればと思っています。ありがとうございました」車内は、しばらくの間拍手が鳴りやみませんでした。

今回の訪問を通しての私見

毎年訪中団に参加、ここ数年は特に年々「負けている感」が増している気がします。

しかし、中国は日本に勝っているからといって安堵はしていません。同じ道（他国に中国が負ける）を歩まないよう、盤石な基礎を構築しその延長にある成長を続けなければならないと考えているようです。私が特に印象に残ったのは、思想、文化の基礎構築に言及される方が多かったという点でした。

レポート:広報委員（株）電研社　野村 明宏

☆詳しくは、12月9日（月）の訪中団報告例会にて

天安門広場にて